

# SHIGACITY FC アカデミー理念

1. 幼児期からの段階的スポーツ指導理論
2. 非認知能力とサッカーを通じた人間形成
3. SHIGA CITY FC の長期的ビジョン

## 1. 幼児期からの段階的スポーツ指導理論

### 1. 1:運動における一般性と専門性

近年幼児期におけるスポーツのあり方が世界的に見直されてきています。ある1つのスポーツだけを教え込むのではなく、様々な競技をさせ、体の動かし方に多様性をもたらすという方針です。

当クラブアカデミーではトレーニングの種類をレベル別に分類し、暦年齢(生後経過した歳月)はあくまで目安とし、身体的にも特徴が違うように、1人1人のレベルに合わせたトレーニングを行えるようなシステムを用いて、トレーニングレベル1ではサッカーだけではなく様々な運動を取り入れ、多様な体の動かし方をつかんでいってまいります。

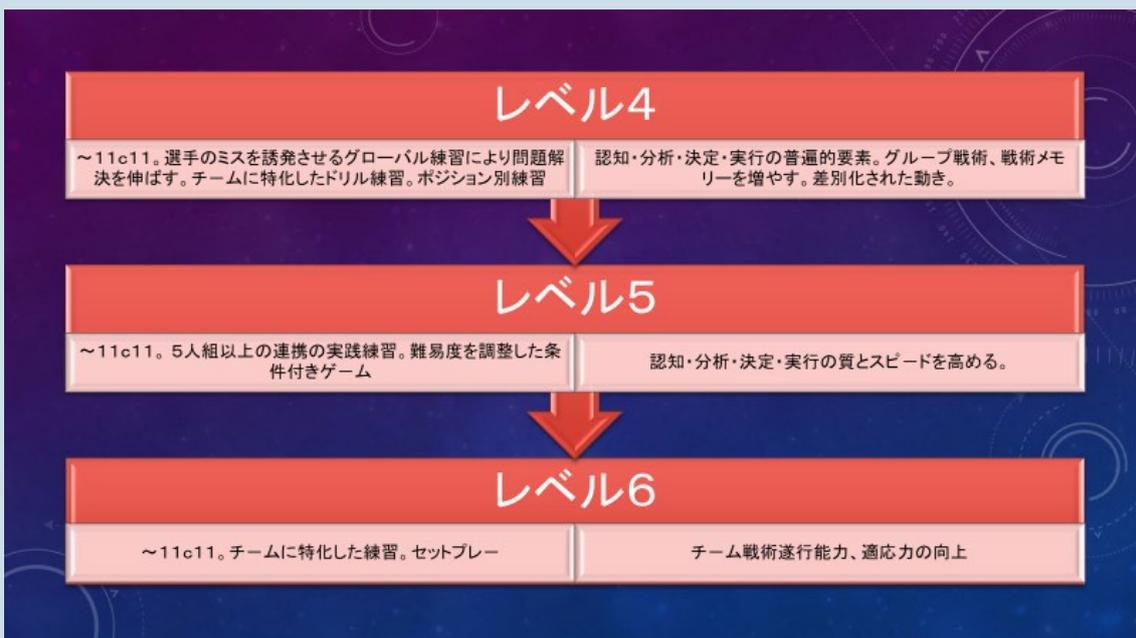
### 1. 2:トレーニングレベル

当クラブアカデミーでは、トレーニングを6段階のレベル別に分け、一般的な運動、体の動かし方からサッカーに特化したトレーニングまで段階的に進め、各個人の要求、レベルに合わせたプログラムを用いていきます。

各レベル別トレーニング方法、目安は以下のようにしています。



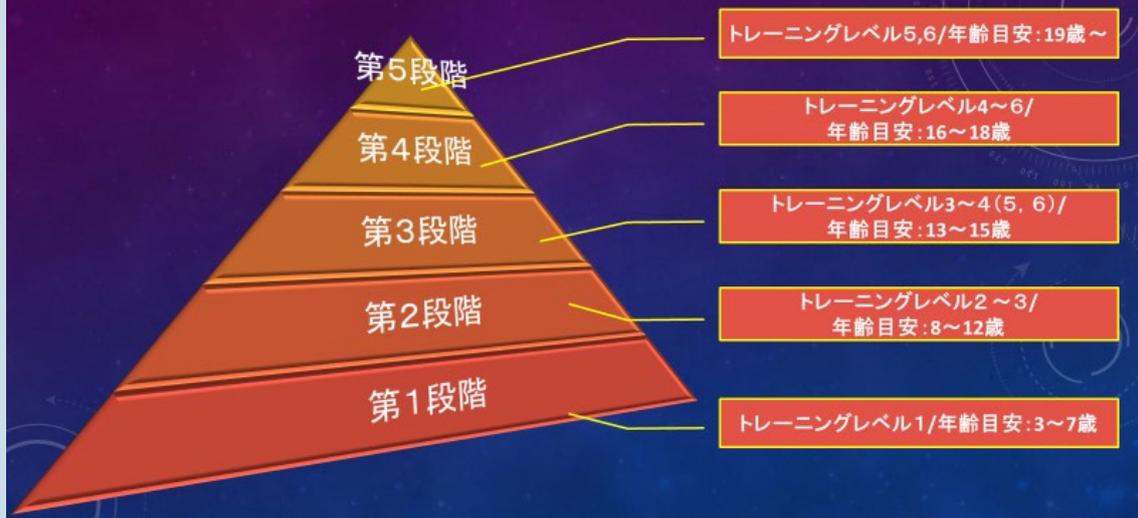
# トレーニングレベル



そして、これらの基準を下記のサッカーの段階別育成モデルに適応し、子供のグループ分け、カリキュラム作りを行います。



# サッカーの段階別育成モデル

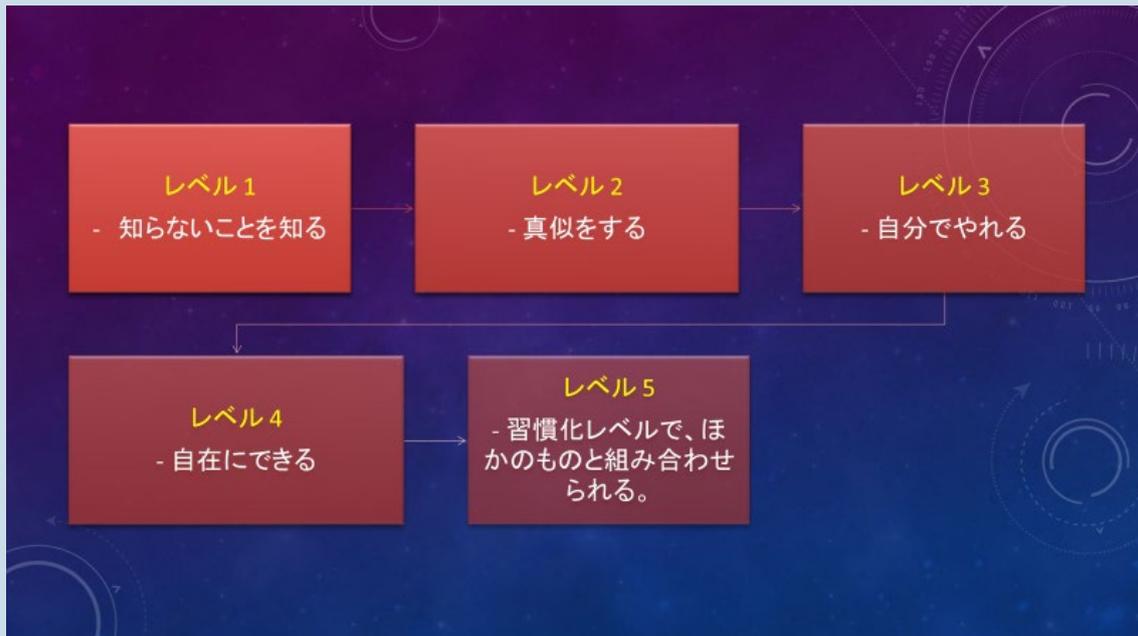


暦年齢だけで分けるやり方よりも子供それぞれの違いを考慮に入れることで1人だけミニゲームの中でもボールを触る回数が少なかったり、逆に周りの子より突出しているため簡単すぎて伸び悩んだりする現象を防ぎ、アカデミー全体でともに成長していくことを目的としています。

## 1. 3: 学習レベル

教育するということにおいて、適切に評価基準を持ち、その子に合った指導をするということはとても大切なことの1つです。当クラブアカデミーでは、1章に述べた基準を用いながらトレーニングメニューを組んでいます。そのためにはその子がある一つの物事をどれほど習得しているか、学習レベルの評価が必要となり、その基準は以下のように考えております。





### レベル1 ～知らないことを知る～

このレベルでは、まだ選手はそのことを知らないことも知らない状態から知らなかったということに気づく。(例: サッカーでは、たとえばキックの種類、インサイドキックなどの存在も知らない段階から、そうやって蹴るやり方があるんだと気づく段階)

指導者はこの段階をできるだけ多くのことに適応し、触れさせることで、知らなかったと気づきを与え、子供の可能性を広げてあげないといけない。

#### \* 教授法

子供が知るためには、お手本を見せる、ビデオを見せることなどによって“知る機会”を与えてあげないといけない。

### レベル2 ～真似をする～

このレベルでは、そのアクションの存在を知ることはできたが、まだ自分のものにはできていないが、コーチの真似をしながらできるようにする段階。

#### \* 教授法



やり方、コツを教える。複雑性をなくし、自分でやってみるためにドリル形式のトレーニングを使う。

### レベル3 ～自分でやれる～

真似をしなくても自分自身でやれるレベル。ただそれをやろうと意識しながらできない。

#### \* 教授法

経験回数を増やし、意識しなくてもできるようになるために、まだドリル形式を使うことが多いが、少しずつ難易度を調整する。

### レベル4 ～無意識化～

このレベルでは、もうそのアクションを自分のものにし、意識せずにできる。習慣化できている。

#### \* 教授法

そのアクションを実戦で使えるよう質を高めるために、判断を伴う練習の中でやらせないといけないため、グローバル形式(味方、相手、判断を伴う練習方法)のトレーニングを行う。

### レベル5 ～応用させる～

このレベルでは、ほかのアクションとも組みあわせてできるよう昇華させる。

#### \* 教授法

判断のあるグローバル形式での練習。練習の中で複雑性を調整し、習慣化したそのアクションの応用方法を教えないといけない。

このような基準を用いてそれぞれの学習レベルを評価し、同じ練習をしても、1回で習得できるレベルは1人1人異なるため、その子のレベルに合わせた種類のトレーニングを行うことが重要であると考えております。そして、そのためのトレーニングを以下の15種類の中から最適なトレーニング方法を選び実践します。



アナリティコ	グローバル	システミカ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Rueda de pase</li> <li>・ Revolución OF</li> <li>・ Revolución DF</li> <li>・ Rutina</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Juego de posesión</li> <li>・ Conservación</li> <li>・ Rondo</li> <li>・ Oleada</li> <li>・ Partido condicionado</li> <li>・ Partido reducido</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Conservación</li> <li>・ Oleada</li> <li>・ Partido reducido</li> <li>・ Partido condicionado</li> </ul>
<p>Circuito</p>		

各選手のトレーニングレベルと学習レベルを照し合わせ、最適と思われる練習方法を使うことで、そして一緒に練習する選手たちのレベルを合わせることで、ぬるま湯環境になることも、周りのレベルについていけなくなりボールを触れない、という現象も防ぐことにつながります。その評価基準をはっきりさせておくこと、1人の意見ではなく多角的に評価することが必要です。

このために、当クラブは指導者が現状に満足せず、各選手の成長のスピードの違いや、チームに起きている現象にできる限り対処できる問題解決策を学び続けること、さらにその評価体制も整えていくことが重要であると考えております。

## 2. 非認知能力とサッカーを通じた人間形成

### 2. 1: 多様化社会へ向けての人間形成

近年のグローバル化社会に加え、2020年にはオリンピックが日本で開催され、異文化に触れる機会は日に日に増えていき、これからさらに増えていくことが予想され、日本人によくみられる、異文化に対する苦手意識をなくしていくことは次世代の子供たちには特に必要となるでしょう。

1つ実際に経験し、考えさせられることがバルセロナでありました。



バルセロナにいたころのチームにはモロッコ人のイスラム教徒がいました。イスラム教にはラマダンという断食の期間があるのですが、その期間は、日が出ている間飲食を禁じられることは有名で知っていましたが、他人に裸を見られるのもいけないそうで、その期間の練習終わりは必ず彼がさきにシャワーをあび、ほかのみんなは練習終わりに汗だくで彼を待つこととなります。その中でも、指導者が何も言わずとも誰一人文句も言わず、そういう文化、考え方なのだとしてそれぞれの違いを認めていました。



今の日本で同じような考え方、適応ができる環境はどれほどあるでしょうか。例えば給食は柔軟に対応できるでしょうか。学校でヒジャブは認められるでしょうか。また、それに対して子供たちは好奇の目ではなく受け入れられるでしょうか。

日本でもこれから様々な考え方に適応していかないといけなくなってきます。そして今の子供たちはそのような社会の担い手となってもらうことになるでしょう。そのような世界で取り残されないためにも、他者を認め、違いを受け入れ、それぞれが互いにリスペクトし合い、共生できる社会のための人材育成を行いたいと思っています。

## 2. 2: 非認知能力とは

非認知能力とは、人間形成に不可欠な能力のことで、IQ や計算力などの数値化できる能力を『認知能力』、可視化されにくい能力を『非認知能力』といいます。

下図は『非認知能力ビッグファイブ』と言われるものですが、このうちのいくつかの特性により、将来的に経済的成果を高めることが立証されています。

またノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマンは、『非認知能力』の向上は『認知能力』の発達を促すとし、特に『非認知能力』の重要性を主張し、それが将来の学歴や収入にまで影響を及ぼすと考えており、今後注目され、必要とされていく能力であるといえます。

当クラブアカデミーでは、この『非認知能力』をサッカーを通じて育てていきます。





## 2. 3: サッカーの特徴 ~なぜサッカーが「非認知能力」の発達に適しているのか~

### 自主性

- サッカーは、大人なら45分間の試合中、指導者による関与が限られており、毎秒変わる状況の中で選手個々の判断が重要となり、それが勝敗を左右するスポーツでもあります。そんな中で、自ら決断、行動するという、今後社会でも重要視される「自主性」が育まれていきます。

### 協調性

- チームスポーツの中でも、サッカーは自由度が高いため基本的にどう動いてもルール上は問題ありません。その中でひとつの目標達成に向かい、他者と調和していくことが不可欠となります。様々な問題、目標を共有し協調していくことを、学んでいくことができるスポーツであるといえます。

### 自己コントロール

- サッカーは試合が始まると基本的に全員が集まって話せるのはハーフタイムの1度だけです。例えば、試合中に大きなミスをしたとしても、集中を切らさず、自ら気持ちを切り替えて続けるメンタルが必要とされます。いくら技術があっても、自分をコントロールすることができなければスポーツ心理学的にもトップ選手とは言えません。サッカーはそうした自己コントロールを育むのに適したスポーツのひとつでもあるのです。



### 3. SHIGA CITY FC の長期的ビジョン

日本サッカーも近年成長を遂げているとはみられますが、まだ発展途上ではあるでしょう。これから、さらに世界ランキングでも上位へと上がっていくためにどのようなことが課題となっているでしょうか。

当クラブは、1つのクラブ内における指導者の評価体制と育成、そして一貫した選手育成システムが不可欠であると考えています。

様々な視点から、様々な意見があることを前提としますが、当クラブの見解として、サッカーチームの指導者は、指導内容、結果ともに客観的に評価を受け、それにより指導者の競争も整備されることが必要だと考えています。

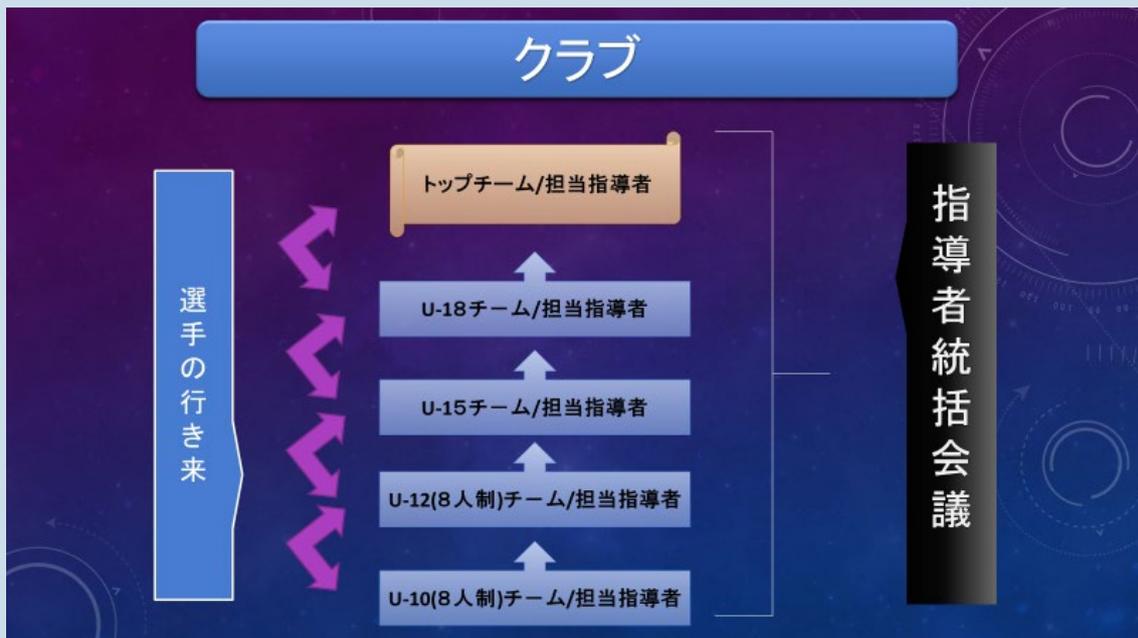
近年体罰問題など指導現場の問題も表面に出てきていますが、いまだに、例えば負けたときの言い訳を選手のせいにし、負けたら走らせるなどの指導も本当に容易に見受けられます。

例えばバルセロナでは、アカデミーを統括し、全カテゴリーの試合、練習を評価する役職が各クラブにあり、万が一そのような指導者がいようならすぐに目に留まり、クビになります。それはクラブの大小に関係なくです。

指導者の評価体制、競争環境の整備により、逆に、若くて優秀な指導者であるのに評価を受けることもなく埋もれてしまうといったこともなく正当なチャンスを得られることにもなります。

また、1つのクラブで一貫した指導を選手にすることによって、例えば8人制から11人制に上がる段階でも、さらに上のカテゴリーでも、選手は適応がしやすくなります。





こうした考えから、当クラブは、1章に述べたサッカーの段階別育成モデルを基に、U-10,U-12,U-15,U-18そしてトップチームまで一貫した指導を行い、抜きこんでいる選手のカテゴリー昇格も含め、常に選手が成長できる環境を作り、そして各チームの指導者を統括するポジションを作ることで、各チームの指導者同士も成長できる環境をつくっていくことを方針とし活動いたします。

そしてそのようなクラブが日本中に増え、それぞれが切磋琢磨し、指導者、選手の競争が構造化されることで優秀な人材の発掘と育成が日本全体でされれば日本サッカーの更なる発展につながると信じております。

当スクールでは、以上のことを踏まえて、一人一人の将来に向けてできる限り多くの財産を与えることを理念とし、活動いたします。

